

卷之二

七



民間備荒錄序

上古神聖之時，於墜也，首憂生民之札瘥，一出于慈惻之衷，而朱始為耨，投術衛矣。惟夫炎帝教稼穡，而民變飲血之俗，遠本草興也。良毒如刺，而人知生養之道。然後伊尹之湯液，張長沙之方論，亦皆祖述神聖之道者也。知此之謂墜之幸，分行此之謂仁術也。

呼世之凌濤末流分派慈朱終全在乎
其間而不投時好言己之所欲言者已
不欲為確乎卓立者自非家傳之
寶固好不克也古語云上醫醫國是
豈採單根別樹皮揮刀圭以治病之
謂哉上以輔贊明王下以登濟黎庶
良相同其功者非此之謂乎與之關者
建部清菴者世以醫仕于本藩間著
一書命曰民間備荒錄介於正山傅氏
需序於予閱之前演救荒之術教民
以支虛之方且擇之品味也精而有據於
其備用也要而易得實是毒民之傳
畧經濟之要簡意是豈一邑園悅之事
乎哉自是及國推而建諸天下則斯氏
之蒙恩賚不可勝紀是豈一時之幸乎
哉竊諸書以傳後昆則不亦幸也不

朽之實耶抑稱之曰一編而更不可
也今若建試者其功德彰氏比諸彼世
醫匠之著局方之著務炫耀於世者天懷
相懸之如何耶蓋國醫之實中北清卷
者銀馬

雜省寶曆庚辰二月啟翌

前典藥頭延壽院道之稿壽國撰

民間備荒錄序

聖之療疾也七方十劑以爲之方法最臣佐
使以存之藥法而收蓄百藥以備備濟濟而
至于其所以歷世補瀉之得宜候急標本之
異治者則得之于其心而應其變猶良醫
之臨敵善制其兵也然不得之於法則無以
救其巧而不竭之於心則無以造其妙其得
之於法者既熟以之於心者亦精而後得之
良醫矣與爾傳醫活老建都公孫科兼內
外志存康濟博覽載籍究補不依書取術果

其法殷勤其心之精而強勉求職生未半仁壽
非授世之典聖現教之其位志氣揚者此
實曆乙亥與開大徵翁炯燮氏之死也
竊立已也乃擬取夏平日所考歸山艾野草
凡可效凶虎者平種詳其事安其考其候
治提綱體列筆以國字名曰武向備錄
凡二卷編成典之是長保正以頌行不邪
肉救疾多効飢民適其難之謂之云蓋為
之作刻書其心在利黎民而仁術明委
法立賢化育而生道也夫嗚呼政之於心

法也至矣盡矣凡志於治國安民之道者
欲懷備荒政者宜先取法于新書且外
是感激不可不知常儆的是王之道使
黎民死於飢寒困窮也可不戒我隱然
憐門人曾振生齋到東都請余考其
事余讀之大嘉翁之用功於仁者固豈
敢言此為序云

實曆七年丁丑夏五月

常州小田度孫飛菴源成朝題于

東都芝街誌寫

東華文博錄

卷之四

卷之四

卷之四

東華文博錄卷之四
卷之四

卷之四

民間備荒錄序
元豐建者兵民間備荒錄也執事跋是深嘉納之
不俟

公命騰寫數十本以頒行郡邑且每邑選識文字熟農事者一人使之督其事教導庶民百姓於是更有更生之望云逸菴曰余於此舉也有大喜三民之免飢餓則不與焉夫用若之治國家也不必親庶政必能信任長臣使不得竭其所能故長臣亦以社稷為己任進忠還補無危懼之心苟有嘉謀微猷足以裨益國家之治者則宜從事唯

告其成功事之不心待報而後敢行也故政令
速行齊天下於民衆庶說豫上下無怨太平之
化於是乎成方今

君處嗣立之初百度草創庶績未熙加以飢
饉當此時諸執事大夫自非如蘅芻諸葛得其
君孰不懷危懼之心承意希旨唯命是從者
哉而今執事大夫一聞建君之說上不及請
命下不詢於衆即日發令宣布邦內非

君度之信任素得其人而諸執事大夫亦得能
竭其忠誠焉能如是哉於是乎足知君臣不相

疑而治道日彰矣此一喜也夫人臣得遇時君之知
而任尊官受厚祿者豈不欲竭忠盡誠以報所
天乎然忠臣義士古今不多有者蓋以衆寡自用
不務聞言路也言路不聞則直言規諫無由入耳
獨師私心不知其過是以其所為忠未心忠而
所為善未心善也故以周公之才之美猶且躬吐
握以招賢者務聞言路也今執事大夫深納建君
之言以宣布其書於邦內則巖穴之士聞之必曰
方今相輔好善能納忠言是吾人盡言之秋也遂以
其所畜積進諸執事大夫而盡納其說而不拒

其人則日聞其所不聞，知其所不知，內足以自
誠而外可以通，庶民之情夫如是，則言路開，
賢士進而執事，大夫之所以竭忠報國者，至其極
也。長臣●竭忠而國不治者，未之有也。此二喜也。夫
士君子有意于憂世拯民而立言者，皆書者無不
欲言聽說行民，故其說者矣。然時有不可，否命者
窮達其幸而上拂人主之心，下所斥，亦有司不得
達其意行其道者，自古而然。雖曰後知已於千
載之下，亦不得已云爾。豈不於其身親見之為
幸哉。今建君上此書也，長臣嘉納焉。庶●後載
焉，可謂言聽說行民被其說者也。而建亦得於其
身親見之，則豈唯人事哉。天將縱之，使建君行
其志，施其德也厚乎哉。天之執施善人也，是喜
之大幸，而余所深以為喜者也。若夫至於親見
得之有更生之望，則人人得而喜之，非余之所
得而獨也。故曰不與焉。書既成而請序於余，固
辭不得命。於是乎書其所獨喜者以贈。

寶曆丙子春三月望，同邑後學志茂逸華書

甫拜題

申林園

實欲西子春二月望日思對樂方六之三事一其
轉不轉亦結是主書其酒園喜書以歸
其而辭也名曰不與語善我而結東結者固
辭之百更坐之望限入入對西事之非空之所
之大幸而乘所新以爲喜書之益夫是結連乃
其心與其辭也其半為天之所結也其心其書
東應長之陣豈知入事結天結難之與數其計
其下而結其結也其五結其六書之而結其結其

民間備荒錄序

王者以民為天民以食為天其天也者不同一也
夫食也者天之所賦也農之所種也而食之者
是養也夫天之所賦也農之所種也而食之者
亦一吾人小稼之所種也乎平是種也乃當其種
也也乎人種也亦農夫之力吾人乃天也而種也
去之今茲霖雨破稼米粟不登農夫之憂人
あり予予之民也予小恐ひすみ以て其種と
しつに民間備荒乃備と稼一邑長保正乃其
彼の天也と種人小創を種へみ空曆乙支五冬日

氏器孔鳥面の老婦男女嘆れり。群衆も目もあて
られぬ。こゝろより、手玉を賭日大慈山先人の墓所へ
詣り、佳運六の孔勢として喇たせしめて恋しき
母れども、元氣を失はれ、妙也危きかき、夜も中て轉
吾人平日農夫の力小て安樂な累月を送り、思
可分のことも種々を愁ては母のくへりと晝夜あ
くも悔ふ。いゝもなき、不学不才多し、公施とへ
き術あり。一日夜友那内勝清の處と宿し
荒政のた小とよひ、これに上り有るし、荒政要覽
とあり、思せられ、ふり、慨然うて、筆に、不景

使の元と後とを歴き、ことと悟り、は書と編て、長保正
小あり、又解毒毒は二方と調合し、同所の民に施す
平日の思ふ、精は、は書十二月、小編たれ、も自序、
孟冬日と記せ、ふ、不忠之、後、委し、は、日、の、終、に、倒て
せと、編る、ふ、ん、た、志、以、叙、く、凡、例、を、契、と、た、の、ゆ、り、
一は、書、也、也、長、保、正、を、教、へ、凡、民、と、叙、へ、し、も、累、年、と
一、我、意、後、の、規、儀、に、依、へ、る、を、又、は、書、第、二、の、部
と、し、け、も、を、食、ふ、る、と、わ、と、辨、し、ら、う、く、春、の、中、
て、命、へ、ま、わ、と、後、に、記、も、凡、民、の、已、中、と、叙、ん
た、ん、か、り、

一 本書の「草丈」の和名と右小注方言と凡そ注

「今改て方言とを文に書入」凡そ注と凡そ注

たのみの

一 乙亥の祝儀は民間小で親製上用の種として

「並あり」草丈若干種也長保正老農も同

「書集」を云々と編て後日海録も凡そ注

「俵ら」の平不字の「り」凡そ注

「夕れ」度く校正も「さす」凡そ注

「そ」も「あ」の「子」の「不」も「他

「微」と「草」根本葉と「須史」の「死」種を

「補」一「異」が「真」と「情」を「又」救「心」の「法

と「補」一「永」く「祝儀」の「患」を「あ」る「今」を「事

不

手書きの注

流民之圖



大
人
於
此
道
之
藉
路
圖



設粥廠
施粥
之圖



發儲蓄
令賑恤
如民之
圖



民間備荒錄目錄

卷之上

備荒樹藝之法

備荒儲蓄之法

卷之下

療重死饑人法

救水中凍死人法

食草木葉法

食生黃豆法

食生松柏葉法

研校方食是録百卷

類批咬嚼之法 豆書

風火咬傷治法 葉書

附諸虫獸傷入書

食草木葉解毒法 去

祈禱

新撰圖書之類

新撰圖書之類

海文

民間備荒錄目錄

民間備荒錄卷之上

奥州一關侍醫清惠建部由正元集甫著

建部由巳三者

建部由水亮葉校

豐州佐伯侍醫 伊藤維則松莖

奥州一關醫官 文關敬貫甫軒

備荒樹藝之法

○天地の間皇氏一日もかけてるは衣食住の三也

千うちむ又切多の金あり 禮記の王制十九年

三年の蓄と上流あり 日本にも上流の蓄急料也

飢饉の極ありしに、今ハ飢てさく我ハ一國ニ
古来より穀荒れ沙汰とて不^レ備粟倉連も
飢民之役となふれば諸氏亦私の終とすべし
穀之作今茲のとき五年は花をうて耕^レる
倍せ我^レ沃^レ之^レ民ハ植^レる^レ以^レ治^レ他^レ郷^レも
沙汰ありへん^レ即^レ今^レ今^レ今^レ飢民とて老弱
許^レ許^レ壯者^レ而^レ之^レ方^レ益^レの^レ我^レは^レ是^レ時^レ平
日也長保正心と不^レそ^レも多^レう思^レ民ハ^レ今^レ我^レ
みとの^レ極^レも飢^レても不^レ食^レ食^レも^レて^レ之^レ一^レ且
車^レ以^レ過^レ去^レ凍^レ俗^レと不^レ免^レとを^レ知^レ又^レ且^レ教^レ之^レ者

ことあり者は我一人の刑獄のこともあり
ませと致^レて^レ我^レの^レ荒^レる^レこと^レあり
ことあり^レ甚^レ哀^レ一^レ郷^レの^レ大^レ祖^レは^レ余^レ民^レ之^レ食^レた
まひて法^レ氏^レ二十^レ年^レ今^レ陽^レ陽^レ除^レ別^レ和^レ州^レ每^レ戶^レ控^レ室
百^レ枚^レ控^レ林^レ二^レ百^レ枚^レ控^レ室^レ二^レ百^レ枚^レ用^レ防^レ備^レ業^レ至^レ二十^レ七^レ年
後^レ今^レ戶^レ部^レ引^レ文^レ書^レ備^レ教^レ天下^レ百^レ姓^レ務^レ要^レ多^レ控^レ室
車^レ每^レ戶^レ二^レ百^レ枚^レ次^レ官^レ百^レ枚^レ三年^レ共^レ二^レ百^レ枚^レ控^レ室
教^レ同^レ違^レ再^レ固^レ和^レ軍^レ令^レ改^レ交^レ違^レ先^レ軍^レ輸^レ工^レ部^レ同^レ令^レ
常^レ付^レ字^レ於^レ所^レ息^レ飽^レ命^レ忘^レ積^レ時^レ命^レ忘^レ定^レ下^レ思^レ為^レ法^レ且
車^レ過^レ凶^レ荒^レ則^レ荒^レ及^レ無^レ措^レ止^レ和^レ民^レ數^レ百^レ計^レ之^レ勸^レ督^レ文^レ例

其成得地後近年は長時武藏國豊後浪浪治延田里皆
安者不無憂也餘預防之村不三二而忘亦工部兵
論氏間但有能地皆令種受事或要出統云云今之
即一語あり九室の心は湯に湯湯泉き氏の西年昔少
と成たりの預防の法と教とて一々成りありけり是
況同村とて一村の月より撰出の明入復次とあり

氏同年也長時武藏國豊後浪浪治延田里皆
安者不無憂也餘預防之村不三二而忘亦工部兵
論氏間但有能地皆令種受事或要出統云云今之
即一語あり九室の心は湯に湯湯泉き氏の西年昔少
と成たりの預防の法と教とて一々成りありけり是
況同村とて一村の月より撰出の明入復次とあり

女内との一れやゆれは遠共憂死其夏の備かてん
不患無奇業の慮無真の真心存母業之を女への
言はるる上之小地明業の託也と及と表とて心之あり
或山年の別を言とあり此所より殺百人の仇氏明
と見れり仇地小の林村入強取をき見とせりかた
見らにはけりて山年種々の苦も入とけりかたのあり
ともく分別子着して業々の凶年に食とまへ
すもの多後とてけり十年後の凶年と防く
應一獲七年の凶二年の文と表との教とて心
心とて心は後の憂もくとなり七年は承己の年

為事し心と則身なり今か得との様をばかすも
他侍と忘れ膝のれ及中よりとんじんと他と
中より中腰底の共州と不知して丸湯と不地と
不志志人権有仙危尸夜不越持懸而代之美
或も不願依荒掛裏の湖と上を池と今在
草木の良毒制法を下を池と先種物は寒とす
一服荒作結束折法 紅敷多と粉と油の上にて日腫

てろくし丸大盛の中へ入し煮きき薬水と入し湯あり
煮の中は盛り着り着日又腫し乾し以て厚下粉に
美の粉と和て食をねい肌湯と好しとす○香に
桂樹葉性熱水浸し黄又さるるに南海岩地又は
味香して用食又飯下飯食ともさるる○車仁膠
搗取食之共性生硬木白味香く食亦可し
一載半は三月事芽芽時栽麥樹每根陸地一畝各
栽麥樹八十株青氏界術曰旱骨之地不任耕種者
歷落控裏別任矣東性燥故又曰若運好味者聖哉

信(あ)りては、
して事(こと)をひらく、
是(こ)の別(わか)り、
と作(つく)るに、
ふりて、
ま心(まごころ)と用(もち)ひて、

一石(い)ちせき、
取(と)りて、
あつ、
ま柿(まがき)と裁(き)削(せき)し、
ま柿(まがき)と裁(き)削(せき)し、

山(やま)島(しま)小(こ)て、
列(れつ)甲(こう)と、
一(い)ち、
便(べん)又(また)は、
山(やま)島(しま)小(こ)て、
一(い)ち、
便(べん)又(また)は、

し園字一とは大畑を指すに非ず小玉くハカ
故にむある人は山の麓麓の備基園家の利園の
字とわくはれとも愚民は田舎の村のみ及びゆゑ
をくしかり水く勤まふハ必と不せしをぬりの兵
す利園の如くを並くた入で謝と一

備荒儲蓄之法

一豊はは言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
島の良馬山谷の遠ひ小て子孫くわらありやれども
田田各百貫又貫文つある地とてのはやりにして空
く我々位布もる地の土地ありて山嶽と利園と

補一

補一は言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田

のふにむらや小もも也て又貫文の言も二百年に於て
百貫利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補二言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補三言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補四言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補五言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補六言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補七言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補八言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補九言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田
補十言枝利園の地とては言五十五貫文の村かて山嶽と行はた此の度後田

る知禮節衣食足乃知愛事礼生於有而廢於無
と云へし一村皆石炭を以て其の利を無道の事と
公格とのつり利便を以て漢の臨淮陽郡にして
函閣と云ふ所の關係と云へし千石の廣地と云
は五石文の石を以て千石に八百石を以て千石
にして千石に千石を以て千石に千石を以て千石
地と云ふ我々の石を以て千石に千石を以て千石
利あり我々の石を以て千石に千石を以て千石
酒にして千石を以て千石に千石を以て千石
る石を以て千石を以て千石に千石を以て千石

貢と云へし七年小石を以て勤謹則益ありて二百
十石の村に佃する石千五百石文を以て千石
秋二石今日の石二百石文と除く千石二百石の
止る石を以て千石に千石を以て千石に千石
と不判別亦如此後この石と考へんと云へし
三二十年に於ては其利酒にして千石に千石
羨魚不如退而結網今より桑柘粟と推して
石は農家の羨むと云ふ石を以て千石に千石
貢不納の憂を上下する石を以て千石に千石
の石を以て千石を以て千石に千石

た光すより熱戻と心臓の間へ度く重くもさす
身小豆へしこくしの上より重く如斯くして活
りしころへ夢の火と焼てをく温煖とゆるやうに
へしふ連火とわわく笑冷乳肉へせり入りて其い
不養生也

○食草本草法

一葛粉 民間まろそふりのねにこ味草辛氣平
性温無毒冬月根と搗搗くくき汁と水煎り
條へんして養服うれれと物も巨穀も汁の具
葉も飲時ハ糖糖食すとす老るるい子て多く収む

馬小飼へし○或説野葛毒あり食之狂氣と云野
葛の和名もいづれハ異なり葛と同字なれば
石氏傳り食せんと患ふ故ありし用

一蕪粉 性極寒胃氣煩雜米粉食之否則病黃
赤黄皮要覽云元平の蕪粉を病又米粉雜食
をれば害り難食也不宜也其害あり又蕪粉や
とむくく食へば目眩髪落小兒をんぬれ肺弱
行不健云云○り毒あり白黒と揆る弊
著て湯のこく極に性味冷と雜食は吐き出
凡體が時人の元とを食わると心死を再いあり

数日後を食せし脾胃少壯と殺死と云ふはたす
不(山)野の毒根と葉と花とを如くして食せし
は毒ありあらず死しうらぐ花とを入らば食せし毒便
兼しうら食せし死せぬものなりをえり出れし毒
第一の毒けしうら肝入胆脹く心とそく十村に
性の竹と心と毒殺日花と食せしものには毒あり
有るよしし油死入かす

一瓦椀根 一各天花粉味苦性寒無毒根と根と刺
至極白ところすくに切し水は浸し一日に三回
水と換て浸し一日入て丸止し搗爛絹十布の袋

一盛之鹽湯で括く細く切のちくはく細く
搗細し十布の袋に沈湯と十糸入ん敷粉のちく
やうしうら水はぬきぬき北窓のちくはく細く
一或は香條を細く切細く搗小し胃食し下敷
粉を糞食しうら○しあありたりし水は
沈しうらくして解し

一止知乃美 香月牛山翁曰傳俗以穰實刺食如
非也山野氏俗以此意和米粉為糕食能殺蠅蝨小
鬼宜食しうら性大寒す搗水糞と十是淘去
毒蒸熟して食し流水は行けて一布十行は毒

をいかに飢て食うも食うべきけいといわれし粉にて
て無難に化すとす

一蓮藕 味辛性平無毒寒小臟器と云調水を用
てへり甜と少如く孝行し寒とませと○又全
藕と指す汁と反火危し法乾し何難
す○兼ハ糖燕と糖こもへり○又蓮藕と煮て
るも灰汁にて煮るとす又けし煮て入けて
煮るともす

一藕蕒 五六月間の嫩葉なり木のうろの干食も
なり性味同し

一蓮實 味甘性平毒あり補中益氣甚食甚
良搗碎て羹と和り粥又破小難食とすれれと
助く○又米粉と和焦餡うて食すとす
一芡實 氏間、赤白とすのみ味辛性平毒無葉
は二月生を莖葉のみを刺しあし嫩くとかり莖は
と刺て食すとす五六月、葉花開きてりし
苞といふ所にも刺し葉梅のうろ刺すは肉よ
強う肉内ありとす、女界を獲のうろ獲の肉は
白米は魚目とす七八月収りて乾葉小海上
下り振る葉食すとす芋のうろ芋と粉とす

蓮華ハス 花ハナ 根ネ 葉ハ 子コ 實ミ 種タネ 子コ 實ミ 種タネ 子コ 實ミ 種タネ

益あり 葉葉ハハ 三日月食ミツツキ 食クハ 一ヒト 十ジュウ 後ノチ 利トク 多オホク して

食クハ 一ヒト 刺サシ 心ココロ 痛イタズ 吐クハ 逆サカ 湯ユ 下シ 痰タマ 熱アツク 食クハ

一ヒト 毒ドク 之ノ 性セイ 也ナリ 一ヒト 年ネン 化カ 之ノ 助トク 也ナリ 也ナリ 諸シヨ 病ビョウ 之ノ 治チ

多オホク 矣ナリ 性セイ 平ヘイ 無ム 毒ドク 益イタズ 氣キ 胃イ 腸チョウ 胃イ 腸チョウ 胃イ 腸チョウ 胃イ 腸チョウ

一ヒト 莖セイ 實ミ 味ミ 甘カン 性セイ 寒サムイ 無ム 毒ドク 一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

一ヒト 散サン 之ノ 功コウ 也ナリ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ 一ヒト 老ラウ 之ノ 治チ

總論して、久食を以て頭暈、破腹、間食、則宜、云々

一種、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

一、味甘性平、無毒、貧民、以飢、之助、小果、以中

こし産難胞衣どしは搗きつ汁と用ひて

云へ

一烏芋 味甘性微寒無毒煮て食も入

一山藥 味甘性平無毒煮て食も入

一黃獨 臣間云けいも味苦澁性微温無毒皮を去

煎煮して苦味と去り食べ

一商陸 臣間云辛く味辛酸性平有毒一云

苦性冷白根と取り切て作行深熱水と撞後洗淨

すはわと製せよはい薄切沸水と二者浸す

夏葉と既して後隔紙入して煎す

取てよけ食すと夏葉とく夏と別ひる

要覽に見えり○又皮湯少く煎煮皮は皮之撞

二之浸す

煮て熟し根ととへ

一葛藟 一名烏陽味辛性温無毒根肥大節解

は浸す神水と云う煮て食も入○不可犯鐵令又吐

逆

○救飢鐵石して切して湯とて煮て水と撞へ二

三者浸せし書か

一蒼朮 味苦甘性温無毒根黑皮と去り薄切二三

者浸せし書か

者水浸一苦子云一煮て熱て食と

一黃精苗 味微兼性熱水浸去苦味淘洗淨極

替油して調食之根九蒸九暴各極熱不別去

喉咽難食一云一

一蒲筍 民間云かきわたり味甘性平無毒蒲筍此

是なり近根白筍と根根剝去其根熱醬油味滑して調食

と甚食とるなり一或根根剝去為頭晒于乾に磨

打餅食するも皆

一菰首 民間云かきわたり一名菰首味甘性無

毒即菰の根とともる者なり凡催の内小は葉を根

と云一性熱味苦性寒此は潤食と云或根根を煮て

為菜合菜羹煮粥食之甚滑飢を云一

一蓋菊 民間云かきわたり一のこ春月小と云り

て根と同草して葉より根根よりと云れり味甘性

寒無毒露出浮水者不堪食根嫩菊性熱味滑

醬油して調食とて根甘生にくる食とるなり

此のて生とるものなり

一菜苔 民間云かきわたり又かいもも本草云一名車前

子一名車輪菜味辛性寒無毒葉及根味辛性寒

根嫩葉煤然水浸一宿さるる定沫と根淘淨

味香滑油膩少で調食又根を食ふは性寒なり
多し根煮て漬麦菜の類へ合せ飲し食ふは
腹又の蕨粉を人糞食へし二品ともは性寒なりあ
れ女脾胃虚弱人大食傷へし流水あり地ろは
煮て流水一宿浸し煮ては味も根煮るとしり○
久しく食し腹水腫顔色青或は泄瀉或は大便秘
結ありとありし上白米と柿粥を煮て焼酎を明し
て夜に吃せぬれば腫消大便常の如くはなりし法也
一敷葉は民間云ふと云ふ又山のふき葉及葶藶其温
無毒也と程と云ふ花は苦辛味熱なり根は

味苦辛と云て後流水一宿浸し苦味と云ふ葉葉
は煉熟食を似し苦味あり解毒法平の如し
一蕨其味性寒滑無毒于茎嫩時採て細く剉取
湯少で蒸煮て後換水二三宿浸淘淨し定清去
し煮て食せし合て飲して食も又流るあり候は
二三宿流水一宿は食ふと云ふと云ふいひて殺し
と云ふ法山所道平の如し民間伝承なりと云ふ
一蕨其味甘食へし性味功能禁忌同蕨類食之
解毒の法も亦同し根と地ろは蕨粉と煎湯の
とく水煎して粉と云うて餅を焼く候へ食

味微酸形似白芍根

一葉草 味苦性寒 莖葉秋冬二節よりやも莖葉ありて

て秋やと食もよくす 又煮乾て収を食へ

一切の毒と解とられり 乾すべく 寒毒と解す

河豚の毒とも解と云身は解と云ふは秋を以

てよく調食す

一傍鏡草 味淡甘而微苦無毒病人無妨其性主

生發同是活患善茹人勿食其物 味微甘白

淨美米と類 炊くは根を以て煮煎可殺飢

一艾葉 味苦性微温無毒嫩艾能治一切瘧患

氣久服止冷痢反湯して蒸燥熱萎の如く合せ

煎すは根を以てよく調食す

一藜藜 食其根と怪くは蒸燥 飯の上を煮

て食も味厚くはよく調食す

一水芹 味甘性平無毒本經曰止血養精得血脈

益氣令人肥健 李子延飛印赤芍 害人不可食諸

芥二月已後以有蜂遺之害人能令淨て後食

一蜀漆 民間云子のさびし即常山也其葉似葉

桐味辛性平致權曰苦小土母あり脾虛の人食すと

そん類く一宿水に浸くさうしくんをこすは

浸せんと

一大劑 民間去のみしりり又ぐまあき味甘性

温無毒此熱と涼と女子の赤白沃し心胎の

功あり痰湯して有熱一水と換へるとは

一小劑 味性苦のより調金の法も亦同ト

一苦菜 多生水澤味微苦性微寒無毒調金のほ

一紅藍苗 性同紅花煤熱全法又葉のより破血

の

の

一紫縛 味酸性平無毒作菜益人藏器司破血下

乳け産宜食之煤熱食

一葎公葉 民間去之と又つり味苦寒無毒

東垣曰婦人乳攪水腫少者てけと併公葉丹

漢曰鮮食毒殺滯氣凡毒熱者食法

一黃瓜菜 味甘微苦性微寒無毒味熱食

一鹿枝 味甘性平無毒治産後惡血不下妊婦

不可食右の殺種と食ふ必極と欠へ

一地膚 民間云りくまけし苗葉味苦性寒無毒

の

樗櫟、くろく食へし

一蕒、味甘性平有微毒、向井元舟、虎屠僂、
各本草曰補益調養の性なり一本堂藥選に
迦勝於芍藥、今華四物湯と云ふといへば是なりや
管絃可用樗櫟、飯或粥之雜煮く食へし、机
鏡の内のくろく、此草にまじりて、苦重根と云ふ
葉大而赤者、名蕒、莖葉小而青者、名虎屠僂、
虎野謂曰、虎條復、虎條未、未何、辟野人嘗
奪能、蕒、山、或得此為、嘉、散、唐、子、常、
黃氏の食し、もろこし、ん、へ

一蕒菜、民間云ふと、じり、味甘性冷利、無毒、補氣除熱、
樗櫟食へし、表、ま、ま、食、せ、ぬ、く、飲、く、又、粥、も、雜、煮、く、
ら、す、り、不可、與、蕒、同、食、○蕒、の、乳、救、性、あり、白、
苧、赤、苧、斑、苧、野、苧、也、共、可、食、○馬、齒、苧、味、酸、性、
寒、滑、無、毒、節、米、間、有、水、蛭、○香、月、牛、山、粉、曰、俗、
謂、有、水、銀、妊、婦、及、婦、人、小、兒、禁、制、而、不、用、故、
野、譜、曰、食、莖、葉、有、紅、白、二、種、入、夏、未、溽、湯、淪、過、
羅、乾、冬、用、旋、食、亦、可、楚、俗、元、且、食、之、○穀、脫、小、は、
樗、櫟、味、苦、辛、性、温、無、毒、利、五、臟、根、治、目、痛、春、月、米、
一、膏、味、甘、性、温、無、毒、利、五、臟、根、治、目、痛、春、月、米、

莖葉生熟皆可食詩曰誰謂荼苦其甘也齊東
坡云天生此物為困人山利之福毛昏味之甘美
又并莖葉之味之毛あり草葉茶葉共可食
吳承翁云一〇江蘇食莖葉生臘月生熟皆可
花時不宜但可作蔬故荒野譜見不味熟食
一〇獨活味甘性平無毒莖葉根共皆味熟食
一稀莖苗味苦性寒有小毒採嫩苗葉焯熱水浸
一苦味之云海淨植得油之調食之流水あり
一省浸之苦味之毒之云一〇
一莖芽根本草名莖根至潔白亦甚甘美根性寒
芽針性平花性溫俱味甘無毒嫩芽と云はと
刺之て食之少四之益あり
一莖蒿 味辛性溫無毒破血下氣煉熟食一
一莖草 苗花俱味甘性涼無毒根亦同莖蒿本
草曰俗名川草花本草一名鹿藿謂生山野者名
宜男風土記云懷妊婦人佩其花生男故也根煎採
嫩苗葉焯熱水浸淘淨由塩にて瀝乾之玄菟先曰
花葉芽俱喜乾不必殺乾根亦可作粉和治最
法道嚴海鏡山氏多類之くろひの粉と云るとして
採之作り根を味しと云へり

一野薺菜 味甘微苦無毒病入小不思之米中

佳品也及根亦燥熱藥也

一防風 枝茂本草云一名扇風味甘辛性溫無毒又

右又頭前令人發狂又尾者發瘡疾○秋飢採嫩

苗葉作菜茹花共味苦性平久食利血氣除積食

一菊 葉花共味苦性平久食利血氣除積食

一雞冠苗 味甘性涼無毒時珍曰治痔及血痔燥

藥食之

一紫葳 味甘性溫寒毒味熱食之○鯉魚同食

生毒毒

一鼠薺草 又名五行蒿味甘性平無毒採莖葉

和米粉餅食之艾之類也治之

一耳菜 具原籍曰葉如佛耳草莖長寸許如蔓

草熟地而生久春葉茂開白花俚民蒸而

食之如藜藿木漢名煤熟食之味苦性平

前

一桔梗苗 根葉味辛苦性微溫有小毒云味苦性平

無毒採葉煤熟換水浸去苦味淘淨味增轉油小

可調食之

一羊蹄苗 民間云去之及和之味苦性寒無

毒枝荒本草曰採嫩苗葉煤熱水浸淘淨苦味油
塩調食其子熟時打子搗末以湯水湯三五次
淘淨下鍋作水飯食微破腹○今試之味微破
根味甘何？

一夏枯草 民間云其味辛苦性微寒採嫩

葉煤熱換水浸淘去苦味○又取湯二

宿中水浸至微食之 秋より枯るに

積り食すとにりしと云り 本草の傳は別へ

思ひて葉根本草の傳は別へ 本草の傳は別へ

一枸杞苗 味苦性寒除煩益氣煤

熱食之○木通煎糖 味甘淡性微寒無毒煤熱食

一皂莢樹嫩芽 無毒煤熱換水浸洗淘淨煤

熱食之

一忍冬葉 味甘性溫無毒嫩葉及花と採煤熱水

と浸して將元と煮 淘淨如茶調食

一木天蓼葉 味辛性溫有小毒煤熱食と伝して

毒と解と云り湯を煮て食之

一藤嫩葉 無毒厚湯にて煮換水二三宿浸淘淨

して浸食之 破血もの之を採り煮て食之

つれ事人、姜、姜に合せ飯、炊、食、く、吐、く

一五加苗、味、苦、性、温、無、毒、煉、麩、食、之、去、皮、屑、風、濕、

性、入、心、心、乳、氏、羊、依、不、葉、と、食、其、毒、は、あ、り、也、

は、腫、ふ、ら、り、の、根、と、切、り、之、を、煮、て、飲、之、腫、消、り、

一野胡藟、苗、一、救、荒、本草、曰、生、荒、野、中、苗、葉、似、家、胡、藟、

苗、俱、細、小、其、根、味、甘、生、人、食、之、食、皆、宜、煎、乳、洗、淨、

去、皮、生、食、亦、可、

一鴨、薺、草、和、石、月、草、薺、草、救、荒、本草、曰、竹、節、上、生、其、葉、

甜、紋、亂、林、嫩、苗、葉、煉、麩、油、塩、調、食、玄、扈、先、生、曰、用、

方、各、淡、竹、葉、薺、過、本、草、曰、苗、葉、味、苦、大、寒、無、毒、每、

治、蛇、犬、咬、○、愚、林、治、蛇、咬、以、其、葉、煮、之、搗、之、在、口、

心、邊、敷、之、と、し、石、月、草、と、同、く、入、り、之、を、煮、之、

煮、て、飲、之、り、脂、水、洗、之、て、痛、を、止、め、腫、を、消、す、

と、云、う、鴨、薺、草、と、同、く、敷、之、と、は、活、之、と、犬、咬、は、皮、を、

洗、之、風、犬、咬、傷、治、方、と、用、之、一、一、病、方、に、し、て、洗、之、

と、云、う、は、必、死、の、病、と、云、う、一、

一酸、薺、救、荒、本草、曰、姑、娘、菜、俗、名、盤、龍、兒、之、名、其、金、

て食へりやとて云へり他云ふては兆のれし早亡備と
り山野の木葉草根と採り食へり米麦の類と歌ふ
計とかり帯よもかくのこもわと食らるるも是元より
御らにのびりけりともわと毒物のやうに云へり山野のわ
食らるるものこもわゆも米麦と採り粥と飲らるる
愚民はえりて云ふもす邑長保正も心をもた
未看飯草而罪飯と云ふも
一牧民忠告曰嘗聞近代為惡者教民種麥煮搗其根
以為餅大者三四斤孰而餅之後值以牛蒸以食
飢民味甘且美賴以全活者甚衆と是元より知りて

凶年にし諸民木葉草根のこもを採りて食らるるも是元より
華北のこもを採りて食らるるも是元より
者と食らるる者も是元より
多し於て食らるるものこもを採りて食らるるも是元より
陳地ありは採らるるものこもを採りて食らるるも是元より
又種を食らるるものこもを採りて食らるるも是元より
と語へり凶年には食らるるものこもを採りて食らるるも是元より
うへり

一蘿蔔 野蘿蔔 胡蘿蔔 菘 牛蒡 七叶夜蘭
以種らわらば同部よ食らるるものよて類食の法に人

のたよ米批味噌の法と裁も多也

米批味噌の法

米批一石 大豆二斗 味噌二斗 酒糟一斗
大豆と釜に醬油を煮て大豆を蒸らす
にくまの合を煮たりて入大豆のけし七蒸す
ろくは蒸すも時火と止糖梅を恒大豆を蒸す
しい合やまに梅を挿入を二十日後とて又
梅を収を煮たりてししとを蒸すたりて
中の水にて製をりてししとを蒸すたりて
食除積滯膏梁久時を食之可也

又方

米批一石 大豆一斗 酒糟一斗

又方

米批一石 酒糟一斗 醬油渣一斗

又方

米批一石 酒糟一斗 醬油渣一斗

大豆と釜にて蒸蒸て梅を挿入をりて酒糟を

入こしとす

一五斗味噌の法

大豆一斗 麹一斗 酒糟一斗

米批一斗 位一斗 位一斗

右一同は梅合をきて用甘美す

不入らぬ

一飛彈味覚の法

大更一斗 位一斗

右常時味覚のしく製し用也

よてなるも用也

一末聲の法

水色懸一斗白小て梅尻のしくに餅子

粒日と怪てよ黄とわす

孔梅研置て細末に位一斗と入

内小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

梅合に小て梅合をきて用也

の諸書は活方詳々として予爾とありて心死れ
病ありて捨て捨く不法來りその侍死甚良
下條體にありていふことと多れし人令に
かて氏間の煩とくさるるにや、故十人と注
して誠効ありと記し

一風大咬傷等が此大、受れざる者ありともある誠を
用いてて瘡口れを急と刺て血ととり一人二人も
呼集のよえすは時足とありとも勝のものも
辰ともつくと上りか下のよへ、尿、淋、小便、瘡口れ
急、かゝるに受り淋とほくは明桃の桃樹とくに

ほくは肉と土と洋造とありて四、人責として、
入らるる人責の事とありていふ世役のより、又と
あると大矣、百はとて、一人責、て、急、急、又別
は右のより、百壯、を、も、か、の、ま、く、も、れ、瘡口れ、
血、又、あ、つ、れ、や、う、の、もの、清、め、る、もの、を、血、來、り、
抽、の、又、二、日、は、百、壯、の、一、日、と、一、千、あ、と、の、肉、は
て、ほ、く、ひ、て、は、核、の、を、い、核、は、膳、餐、と、肉、を、し、て、塗、り、
布、を、い、俵、と、て、こ、を、空、へ、一、袋、と、く、時、小、は、又、湯、を、腹、
器、と、は、く、し、落、し、血、水、め、る、う、ち、は、袋、を、一、血、を、
す、し、て、膳、餐、を、い、か、し、て、身、と、く、一、又、天、南、星

防風^{トク}不^{トク}合^{トク}細^{トク}末^{トク}にてちまきし。心^{トク}腹^{トク}はは^{トク}非^{トク}と^{トク}行^{トク}き
けと^{トク}えり^{トク}一^{トク}盞^{トク}つて^{トク}の^{トク}竹^{トク}七^{トク}も^{トク}廿^{トク}九^{トク}日^{トク}ま^{トク}せ^{トク}七^{トク}盞^{トク}と
於^{トク}心^{トク}口^{トク}へ^{トク}入^{トク}ると^{トク}い^{トク}し

一^{トク}膏^{トク}者^{トク}獨^{トク}升^{トク}麻^{トク}者^{トク}振^{トク}湯^{トク}と^{トク}調^{トク}合^{トク}して^{トク}も^{トク}い^{トク}於^{トク}心^{トク}口^{トク}へ^{トク}入^{トク}し
非^{トク}け^{トク}と^{トク}飲^{トク}ま^{トク}と^{トク}し^{トク}ま^{トク}う^{トク}○又^{トク}麩^{トク}面^{トク}を^{トク}て^{トク}幾^{トク}人^{トク}死^{トク}と^{トク}用^{トク}
ひ^{トク}か^{トク}と^{トク}ち^{トク}か^{トク}う^{トク}味^{トク}者^{トク}け^{トク}と^{トク}口^{トク}合^{トク}及^{トク}吐^{トク}り^{トク}け^{トク}ひ^{トク}て
使^{トク}葱^{トク}白^{トク}と^{トク}葱^{トク}白^{トク}を^{トク}又^{トク}杏^{トク}仁^{トク}と^{トク}煎^{トク}て^{トク}塗^{トク}ま^{トク}と^{トク}い^{トク}し^{トク}此^{トク}も
人^{トク}真^{トク}懸^{トク}人^{トク}皮^{トク}の^{トク}此^{トク}切^{トク}と^{トク}と^{トク}し^{トク}ま^{トク}う^{トク}○又^{トク}此^{トク}煎^{トク}法^{トク}
して^{トク}も^{トク}毒^{トク}日^{トク}攻^{トク}侵^{トク}百^{トク}日^{トク}注^{トク}して^{トク}毒^{トク}も^{トク}と^{トク}の^{トク}し^{トク}雄^{トク}活^{トク}
の^{トク}患^{トク}あり^{トク}ぬ^{トク}と^{トク}良^{トク}醫^{トク}と^{トク}た^{トク}う^{トク}再^{トク}車^{トク}凡^{トク}如^{トク}此^{トク}也^{トク}

と^{トク}利^{トク}わ^{トク}血^{トク}尿^{トク}と^{トク}十^{トク}五^{トク}成^{トク}と^{トク}其^{トク}毒^{トク}を^{トク}て^{トク}淫^{トク}淫^{トク}を^{トク}入^{トク}し
ら^{トク}れ^{トク}心^{トク}死^{トク}の^{トク}病^{トク}と^{トク}あ^{トク}り^{トク}意^{トク}以^{トク}して^{トク}往^{トク}古^{トク}あり^{トク}あ^{トク}る^{トク}と^{トク}せ^{トク}し^{トク}後^{トク}か
諸^{トク}書^{トク}に^{トク}詳^{トク}し^{トク}載^{トク}せ^{トク}れ^{トク}る^{トク}民間^{トク}と^{トク}して^{トク}毒^{トク}と^{トク}あ^{トク}り^{トク}ぬ^{トク}ゆ^{トク}也
必^{トク}死^{トク}と^{トク}う^{トク}へ^{トク}ぬ^{トク}ま^{トク}不^{トク}便^{トク}の^{トク}事^{トク}あり

室^{トク}曆^{トク}十^{トク}二^{トク}年^{トク}の^{トク}故^{トク}より^{トク}凡^{トク}犬^{トク}を^{トク}む^{トク}り^{トク}し^{トク}れ^{トク}受^{トク}傷^{トク}せ^{トク}ら
ず^{トク}者^{トク}志^{トク}を^{トク}治^{トク}之^{トク}は^{トク}赤^{トク}と^{トク}乾^{トク}と^{トク}る^{トク}と^{トク}し^{トク}神^{トク}と^{トク}く^{トク}毒
氣^{トク}と^{トク}扱^{トク}ゆ^{トク}し^{トク}それ^{トク}は^{トク}再^{トク}毒^{トク}の^{トク}患^{トク}あり^{トク}百^{トク}金^{トク}の^{トク}商^{トク}あり
ぬ^{トク}れ^{トク}も^{トク}腫^{トク}唇^{トク}瘡^{トク}と^{トク}ま^{トク}み^{トク}痛^{トク}甚^{トク}しく^{トク}小^{トク}兒^{トク}婦^{トク}人
其^{トク}痛^{トク}は^{トク}甚^{トク}や^{トク}く^{トク}治^{トク}療^{トク}と^{トク}懈^{トク}と^{トク}痛^{トク}と^{トク}あり^{トク}す^{トク}ら^{トク}の
と^{トク}う^{トク}仍^{トク}ま^{トク}り^{トク}凡^{トク}犬^{トク}を^{トク}將^{トク}時^{トク}不^{トク}正^{トク}之^{トク}糞^{トク}と^{トク}處^{トク}

くつし者もゆり後冷酒小て人真を没去り確黄
乳毒は多し細末を馬齒莧汁調へ煮出し内け
もて敷せのち布はくすりをへし内腹は寒
へけとぬ二三聖飲へし若も村に醫者ありし丹麻
葛根とちまひ飲へし

一蛇人の口を腹内肝門へ入るとりは蛇まがかり
出さぬあき処と細糸はくすりを結うたし小口又ハ
刺り以て尾と敷其門へ胡椒二三粒入れ強くとり
を白芷細辛雄黃五靈脂各多し細末に冷酒
で調服せしめ蛇死してちまひ上り此腫毒毒水

加へれりやと

一蛇咬れぬす人川を流るへすは毒を水よりとり是ど
はくすりも水痛はく毒乳のつらもの

一蛇咬れぬす人腫わとすりぬへしは揚子梅漬煎
のれりちまひは痛生毒のほつもの

一蜂蟻咬て毒虫を敷れしは硫黄の細末
調敷へし痛つらうは酒まで飲へし

一馬咬れ痛強くは肉腐るところは蘿蔔の葉汁と
塗へし若も使傷は生薬と煮てすり乾葉と細末

下り胡麻油で調敷へし

一猫の便をとり、薄赤汁と塗り、又大の毛と洗て傳

ふくしぬぐふ又大葉と塗るといふ

一飛の便をとり、猫の便と塗ふべし猫は毛と傳ふ

それをして効さくの子の麝香の末と清味して

潤塗ふべし 痔瘻香よくあり、丸じ効すもすつ

麝香は赤小豆の粉より丸すべし

一熟し傷れざるに葛根を捣爛し、敷す、其内服す

も葛根の汁と二三度飲べし

凡一切虫鼠は、皮傷、痛、赤く毒口へ入るへき

中しむものは、良醫とれ、毒水、凡高功散の粒と丸

て下とす、しそ汁、板皮の妙術とあり

赤くしむると、麻薬とたのむべし、此の毒

食草木毒解毒法

荒政要覽云、昔、凡苦行僧人入山、耽靜心、炒鹽入竹

筒、携性云、食草木有毒、惟鹽可解毒、凡の荒政要

の解毒法、凡の凡氏の死をも、此の毒の弊へ、

後毒と食せしむ、此の毒、今こゝろ、

皆ふ、性して解毒する、故荒解毒丹と申すべし

毒つとくして解毒する、神效廣濟丹と云、服

すべし、此茶は、入す、村、此茶と云、

毒ありては、又、水、火、
○又、熱、風、燥、火、
性、の、こ、も、う、り、て、余、症、あ、ら、ま、の、五、加、ま、の、候、と
費、し、飲、み、物、の、し、も、の、し、り、

牧、民、忠、告、云、災、異、之、生、常、出、於、人、所、不、意、識、
素、有、其、備、甚、之、不、足、為、憂、也、本、民、聞、多、無、事、
積、火、旱、の、災、あ、れ、し、落、無、所、手、去、荒、大、札、之、憂、
は、天、災、に、由、て、人、口、の、と、六、十、七、事、を、作、り、至、誠、
勸、天、地、感、恩、神、を、一、事、古、今、一、歴、こ、一、て、
あ、ら、ま、り、れ、の、水、旱、の、災、は、荒、大、札、の、憂、あ、ら、
必、と、祈、禱、と、へ、ま、る、之、祈、禱、と、ま、至、非、沖、並、

又、曰、向、是、鴻、之、時、
有、九、年、之、洪、水、也、
斗、之、斗、是、明、
大、王、桑、林、之、野、
於、之、為、武、天、
雨、行、し、り、
忽、天、雨、數、言、重、
同、コ、リ、リ、
遠、強、調、り、祈、禱、
盛、天、雨、と、し、之、財、入、但、願、し、ら、も、り、も、至、誠、に、
下、祈、ら、れ、何、と、し、感、恩、の、り、ん、や、

○祈禱

張、希、孟、云、凡、有、祈、禱、不、必、分、寒、暑、居、言、以、思、已、行、
民、有、克、將、已、有、變、與、政、事、有、未、善、數、觀、國、之、心、有、未、

誠無則如儀行事有則必使進改而後請焉夫
勤天地感鬼神非至誠不可繼也文惠未除則
從此進矣夫かくのとき道徳と考へ衆農と云ひ
こゝろ賣買沐浴して已意の及ばず誠惻怛之心と
もつて移濟しての張希孟感天雨のときとせ
さかひへん宋均立德陸尼漢河卓茂行化理不
入境虎埋ともく德化と感しともいふことと況於天
地鬼神乎

牧民忠告八元の西臺中丞張養浩字希孟
いふ人の仙とともいふ也同ト代の彭炳と云へ

予書に序して曰高唐郡從古為崇安令
得其善推行之崇邑大治自垂白之老皆
生未嘗見此賢令也深山窮谷之民皆設
詞令以就其首壽忠告之册効有是哉他從
吉謂何曰愚得中丞一二語而幸不多得罪
於瓦釜中區區也と記せり 日本にては土澤
靈神給の城上肥後守正文公御在世の御時板倉
公（肥後守）京郡（肥後守）牧民忠告一部と猪た
らしむるは靈神の御とありて有司の
者讀む公ありし書なりとて再教

民獲免苛毒者則鑿家之業書矣可謂
扁矣請嘗論之夫古者備鑿不有二名儒
則未不為鑿而鑿固未不儒也自黃岐
氏以降史策所載歷之可觀也從有專門
而岐而為二為三為八家凡流嗟國奔社
撰未有甚於此時者也是何則為藝為
技以為活計之媒也人苟計活已則何
暇而活人之為耶其於仁者之心實天淵

耳蓋若清庵之為於今則如迂雖然於仁者
務本之心亦冰鑑玉臺哉故所以尚古之君
子望之退而省之亦以足大發彼鑿之為
鑿之道矣吁我復何加焉哉由而思之國自
有土宜天下之地產不可量則奚止此書之
所載耳乎哉然則公之梓之以傳布四方
廣與天下共焉則必也將有感起詔續者
庶幾無藍田遺珠之憾詩曰倡之和之善

故建氏既唱之自今之後又和之以成其美者誰耶皆實曆庚辰三月朔旦

前典藥頭延壽院講學

土州井戶玄盤識于江都中橋

之通齊

氏聞傳錄跋

清者其手編是書固所為其癖也故編以音韻俚談自拙
藝備蓄之法至乎新購齊居之戒凡所以備於災沴惠於不
虞者庶不旁搜而博採也若抑若太可致疑似之數明序之
嘆者乃俾蓋工一一摹形狀是之於後錄豎子細婦之惠報
可了矣若夫風狗之方法則先生多年之鑽研尤選擇抽控
無施而不神驗也雖既載于一家之書且非是編所關更屬
閭閻所見焉云其卷意之周用心之勤皆如斯而已茲豈窮
鄉之抄冊哉實元之之鴻寶牧民之要典也頃因書肆之請
文與關甫軒等細加校訂以付剞劂於戲是書行于四方
則凶年無凍餒之戶饑歲無流凶之口各養其老長其幼
至貳焉然舍編鼓腹者焉先生之澤豈淺鮮乎哉

伊藤雅則謹跋

備荒錄同校

曾根希方意三

大概茂番玄染

結城得英弁首

高橋雲臺時義

同藩門人

氏月日先後

丁卯之元

斤の事月

可長

俳諧頭殘集

此部古本
辨録書

五冊

片敷

同部古本
辨録書

二冊

芭蕉桐の一葉

二冊

同書

同部古本
辨録書

一冊

其角羅漢集

二冊

同書

同部古本
辨録書

一冊

素園集

此部古本
辨録書

三冊

奇文要語

同部古本
辨録書

一冊

磯乃茂

此部古本
辨録書

二冊

はく書

同部古本
辨録書

一冊

心くも

此部古本
辨録書

二冊

寒葉齋書譜

此部古本
辨録書

五冊

根かり

此部古本
辨録書

五冊

水のゆく

此部古本
辨録書

五冊

志道軒傳

此部古本
辨録書

五冊

竹藪不斎想

此部古本
辨録書

全

左傳屬事有魏元文 二冊 大前十二百四 二枚

龍門先生文集二名 二冊 歷代事蹟圖大詩集繪訂五 二枚

大經錄日原先生著 二冊 物類品彙平實編注著 六冊

經義折衷金華先生著 二冊 十體千字文金華先生著 一冊

陸賈新語南漢書著 一冊 六體千字文金華先生著 一冊

玉元美尺牘 二冊 搜播碑銘胡名文之文 一冊

易學辨疑金華先生著 一冊 字畫溷海華法書 二冊

大史草句唐本編刻 二冊 石印集說形刻口法 二冊

抱入花の圖入花 三冊 寐惚先生文集注 一冊

古言樣百本集の詞 一冊 笑府唐 一冊

百人一首解重 一冊 唐明詩鍵詩作書 一冊

文琴詩作書 八冊 大東地名彙詩作書 一冊

あつりく料詩作書 二冊 詩學小成詩作書 四冊

民間備荒錄詩作書 二冊 又詩作書 二冊

信濃地名詩作書 三冊 齋帖詩作書 二冊

七觀音經 明抄 卷一 藤治茶談 津田

唐華其本十七帖 明抄 外科根專 卷一 二冊

釋教寺藏中 蓮戲畫帖 卷一 西遊紀行 卷一 二冊

解體新書 河内氏藏 卷一 四溟陳人詩集 卷一 二冊

同約圖 卷一 五段 郊華集 卷一 全

名物畫持 卷一 二冊 繪卷 卷一 全

市隱草堂集 卷一 繪卷 卷一 全

詩學楷材 卷一 辨物名所集 卷一 全

大町三丁目

松田氏

大町三丁目

松田氏

大町通

大正

卷四

大正

卷四

大正

